

# 八重山諸島波照間島採集の狭刃形石斧

A Narrow-Blade Stone Adze Collected on Hateruma Island in Yaeyama

安里 嗣淳・本田 昭正

ASATO Shijun・HONDA Syosei

---

ABSTRACT : The Shimotabaru site in Hateruma Island belongs to the Early Yaeyama prehistoric period. Around 1970, a brother of Honda Syosei found a stone adze from a footpath by a field adjacent to the site. It was a "narrow-blade stone adze," with a blade narrower than the body width that is particular to the Yaeyama prehistoric period. It has been emphasized that the blade-polished adze was the major type of stone adze in Yaeyama district; however, the narrow-blade adze is important as well, since it suggests a relationship with Southeast Asia.

---

1970年頃、波照間島出身の本田昭正の兄が、島の北岸下田原貝塚より約200mほど西側の畠地土手から石斧を採集した。土手には耕作の際に出てきた石灰岩礫などが堆積していたことから、この石斧も畠地から耕作で掘り出されて土手に捨てられたものと見られる。したがって、この石斧は下田原貝塚を含むこの一帯に居住活動をしていた先史人が遺したものである可能性がきわめて高い。なお、下田原貝塚は何度か発掘調査がおこなわれており、調査報告書が刊行されている。（金関丈夫ほか1964、西村正衛ほか1960、金武正紀ほか1986、木下尚子1987）。

## 石斧の石質と形状

この石斧の石質は、元県立博物館学芸員の神谷厚昭氏（地質学）の同定によれば緑色片岩である。タテ（長軸）の中心線が12.8cm、ヨコが頭部付近の最大幅4.4cm、中央部付近が4cmとなり、さらに刃部縁端付近では3.4cmとなる。つまり、頭部幅が最も広く、胴部から刃部へかけてしだいに狭くなってくる狭刃形石斧である。厚さは中央部で2.4cmであるが、頭部から三分の一ほどは段差をもって少し厚みが小さくなっている。意図的なものか不明だが、この三分の一は剥離欠落によって生じている。製作時に意図したものであれば、柄への装着にあたって緊縛を強固にするための、または使用による衝撃を受け止めるズレ防止の段差かと考えられる。意図的製作とすると、有段石斧に類するものとなり、注目すべき形態といえる。使用時のものであれば、片岩の性質によって衝撃によりタテ方向に剥離したものであろう。

平面観は表面が中央にタテ方向に丸味を帯びた稜線をもち、両端に向かって急激に薄くなる。裏面は対照的にほぼ全面が平坦で、刃面だけが斜め方向に研ぎ出されている。したがって、その断面形は三角形である。三角のいずれの隅も丸味をもつ。側面観は断面三角形であることから、両面とも表・裏面の接合端が縁となり、表面の片側面が同時に側面として見える。平面、側面とも全体観としては概ね左右対称形である。刃部の縁は側面観では中心軸に位置する。しかし、刃面の正面観からすると、平面の裏面から斜めに研ぎだしてあるために、表面側に向かって弧状を呈している。刃面の平面観は刃角をもたず、刃縁は正円に近い円刃状を呈する。刃面の使用条痕は明確には観察できない。

全体の表面観は比較的滑らかであるが、剥離痕跡と見られるやや大きめの窪みや、敲打痕とみられる小さな窪みが随所に見受けられる。全体的に研磨を施し、上述のような窪みを無数に残すものの平滑な手触りである。

この石斧の素材は自然石がすでに断面三角形になっているものを選択し、片側を折って頭部とし、もう一方を研ぎだして刃部としたものと考えられる。このような断面三角形の自然石は河川や海岸など、水磨を受けやすい地域でしばしば見受けられるものである。ほとんど石斧の基本形に近い自然石を利用したわけであるが、表面研磨にあたって剥離や敲打痕を完全に潰すことなく仕上げる手法は、八重山地域によく見られる半磨製あるいは粗面整形の伝統に共通するものである。

## 狭刃形石斧と八重山型石斧の特質

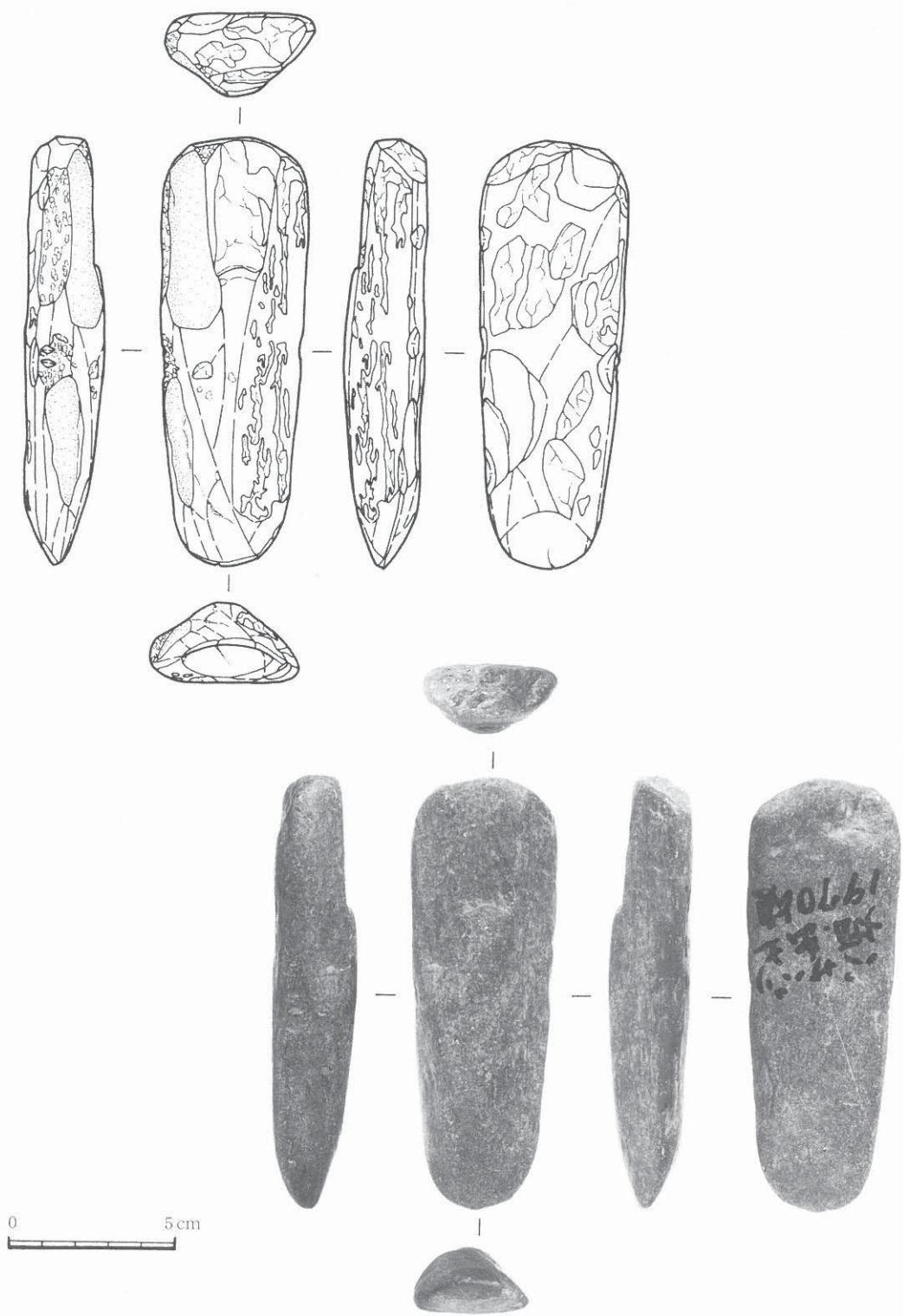
狭刃形石斧は八重山先史時代の石器文化の特徴のひとつである。この名称は高宮廣衛氏が名付けたものである。筆者はかつてこの形態の石斧に注目して「尖斧」と称したことがあるが（安里嗣淳1985）、高宮氏によれば東南アジアの尖斧beaked adze（刃先がペン先状に鋭く尖り、刃面の中央に稜線をもつ）と誤解される恐れがあり、八重山のそれは刃部の幅が胴部より狭いという意味で「狭刃形」が適切とのことである（高宮廣衛1994）。

八重山先史時代の石斧の形態は、平面形で見ると前期・後期とも基本的には三つに大分類できる。（高宮廣衛1999）。それは頭部から刃部にかけて幅が広くなる撥型、概ね平行な幅の短冊形、胴部より刃部が狭い狭刃型（逆撥型）がある。短冊形は厚さはあまりなく、平たい薄手の石斧が目立つ。平面の両側縁から中央にかけて剥離面があることが多く、中にはその断面が部分的に三角形あるいは山形を呈するものもある。これら三つの形態は八重山型石斧の特徴的な形態であるが、前期と後期に際だつた違いはみられない。

八重山先史時代の石斧は、その形態や器面の研磨状態によって分類観察しようとするとき、常にその粗雑な造形や研磨、非相称性の多さゆえに、基準の設定に戸惑うことがある。それは打剥を中心とした整形によって石斧の基本形を造り、敲打を加えるものの剥離によってできた形状をあまり修正することなく、斧身部の凸面に簡単な研磨を加えるという技法によって製作されているからである。一般にいねいに研磨を施すのは刃面のみである。中には刃面の研磨も施さない打製石斧もある。斧身の打剥面は凹面をなしている部分が多く、研磨が加えにくいということもあって、胴部の全面研磨にはあまり関心を示さないようである。また、打剥作業段階で成形をほぼ終了してしまったために、左右対称形を求めにくい例がよく見られる。剥離面は一定の狙いのもとに形成されているとはいえ、ある程度の偶然性を伴うことから、左右あるいは表・裏面がうまく相称形に仕上がることはあまりない。したがって、できた石斧の形状をあまり細かく分類しても意味をなさないことも考慮しなければならないだろう。

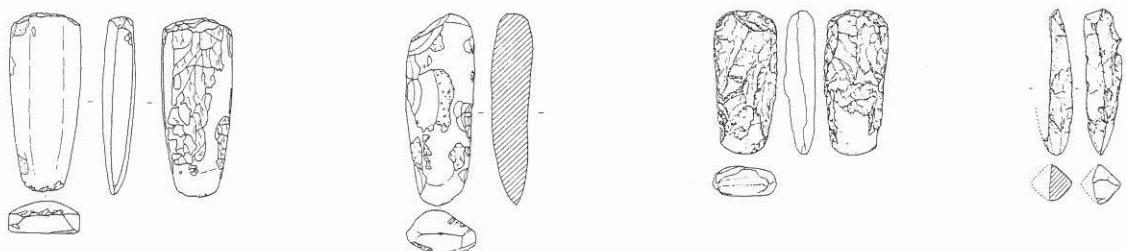
八重山型石斧の特質は局部磨製だと半磨製だとという研磨面よりも、器面のかなりの範囲が粗面整形という点にある。この場合の粗面とは凸面のみが研磨されて、その間に無数の研磨されない窪みをもつものも含まれる。というより、その方が多い。研磨という観点から見れば、それは局部磨製や半磨製であり、また磨製といえども全面が平滑な石斧はかなり少なく、ある程度は粗面整形面を残しているのである。そして、この粗面整形こそは、全体形としては撥型、短冊形、狭刃形などと分類される、殆どの型の石斧に共通するのである。しかし、粗面そのものは素材の自然形や剥離の偶然性の影響を受けて、不規則なことが多い。この「不規則な器面構成という規則性」こそが八重山型石斧の基本的特質なのである。従来早稲田大学チームの発掘調査以来言わってきた「前期から後期へ向けて石斧は大型化する、また研磨面も拡大する」というのは、高宮廣衛氏の分析によって後期には「大型のものも現れる」ということはあるが、大型化するとはいえないことが明らかにされ、研磨面もその基準のあいまいさを前提にしつつも前期・後期とも終始磨製が優位にあるとした（高宮廣衛1995）。

1996)。言い換えれば、従来言われている「局部磨製石斧が多い」という特徴もそうとは言えないことになる。しかし、これは「不規則な粗面整形を基本とする」と表現を変えることによって、すなわち視点を変えることによって妥当性をもつと言えるのではないか。高宮氏が磨製としたものの多くは実はすべてが完全に円滑な磨製ということではなく、粗面整形をベースにしつつ全面の凸部に研磨を加えようと「意図しているもの」を基準としている。物理的な研磨面の範囲ではなく、全面を研磨し

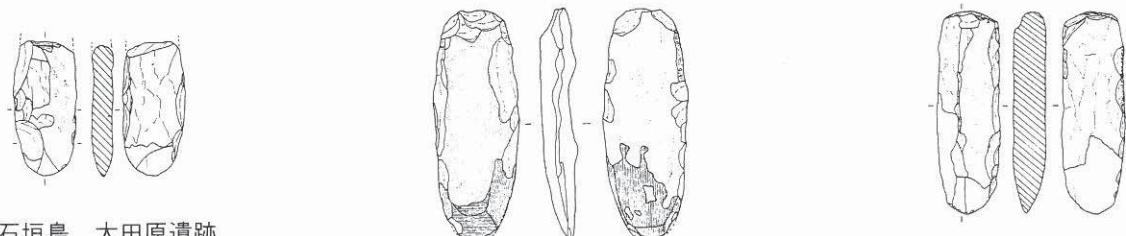


第1図 波照間島採集の狭刃形石斧

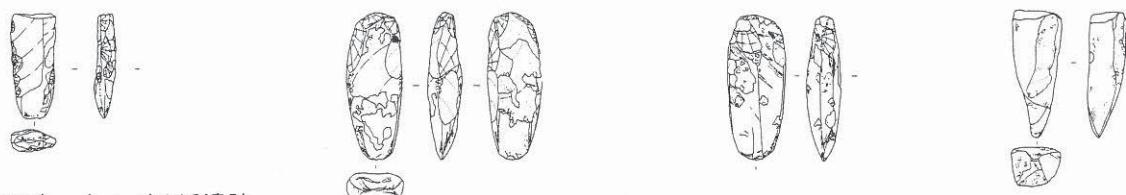
前期の狭刃形石斧



波照間島 下田原貝塚

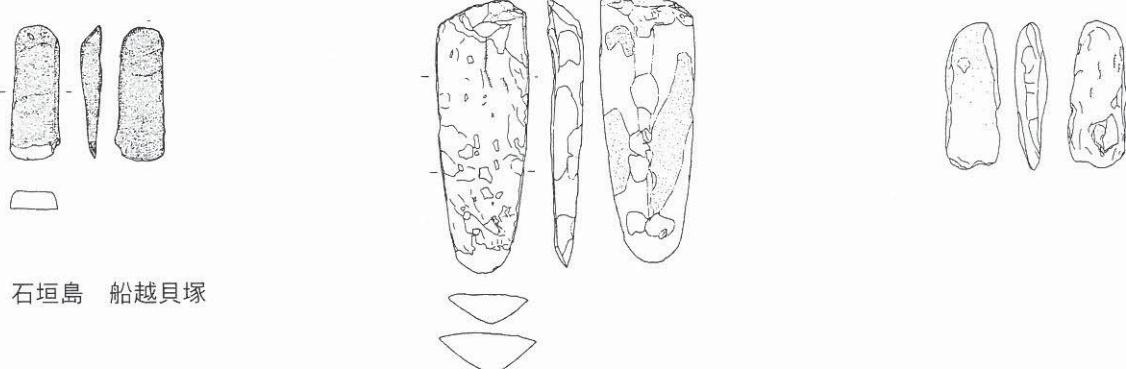


石垣島 大田原遺跡

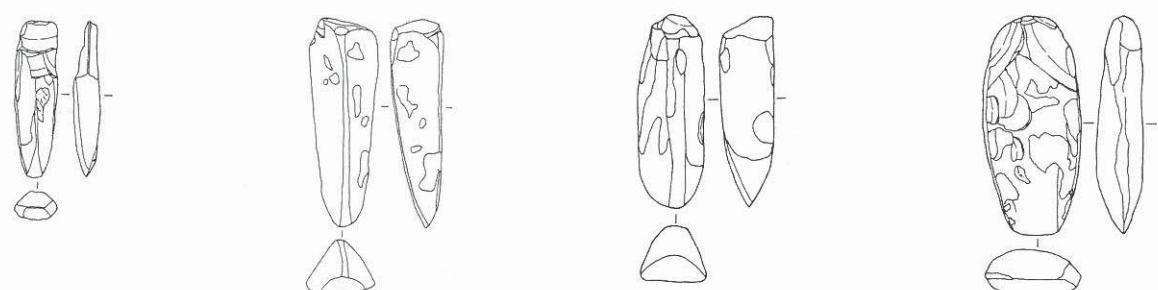


与那国島 トゥグル浜遺跡

後期の狭刃形石斧



石垣島 船越貝塚



石垣島 崎枝赤崎貝塚

第2図 参考：八重山地域の狭刃形石斧 (縮尺不同)

ようと「意図した」ものは磨製として分類しているのである。したがって、直感的に局部磨製あるいは半磨製でも、磨製に分類されることもあり得る。しかし、これも視点を変えれば粗面整形という点では共通するのである。八重山の先史時代人たちは石斧を製作するにあたって、磨製石斧を造ろうと意図したものの窪みまでは研磨が果たせなかつたのではなく、粗面のままで仕上げるが、凸部は扱いにじみやすいように少し研磨をして潰しただけのことであろう。剥離と敲打を基本とした技術であったといえる。

ところで、阿利直治氏は石垣島大田原遺跡の石斧の分析を通して八重山先史時代の石斧のほとんどは横斧すなわち手斧型だと主張している(阿利直治ほか1982)。しかし森威史氏も指摘しているように、観察結果として統計的にそれが示されているのではなく、印象として主張しているのであり、確たる根拠はない(森威史1995)。横斧を示すとみられる直交方向の使用痕が確認されているのは全体のわずかにすぎない。丸木舟作りのための横斧として、いかにも海洋民にふさわしいと考えたのかも知れないが、私の南方での民俗観察例では斧身だけではタテ・ヨコの判断は難しいように思う。私はフィリピン南部のタウイタウイ島およびシブツ島で丸木舟を造る作業を観察する機会があったが、なんと同じ斧身がタテ斧にもヨコ斧にもなる回転式なのである。斧身を取り付ける柄のソケット部に仕掛けがしてあり、斧身をその都度90度回転させて、ある時はヨコに、ある時はタテに取り付けて使用するのである。タテ・ヨコを固定的に考えてはならないのである。斧身の刃の形も重要な判断要素とはなろうが、柄の形状や取り付け方によってはタテ・ヨコ両方の機能を持ち得る。もちろん「いずれか専用」はあるだろう。ただし、私の民俗観察例の斧身は金属であり、あくまでも参考にすぎない。さて、紹介した狭刃形石斧は上述のように粗面整形という点、あるいは断面三角形という点などからも八重山型石斧の特徴を備えている。そして従来あまり指摘されてこなかつたが、この狭刃形という形態も八重山型石斧の三大分類のひとつを占める重要な型である。その用途は刃部の狭さからやはりノミ的な用い方、すなわち丸木舟を製作する際にカーブ面を削る作業に適した斧として製作、使用されたものと推定される。それではヨコ斧かというと、さきほどの民俗例からすると柄への取り付け方でいずれにもなり得るものであり、どちらともいえない。さきの民俗観察例からすると、丸木舟の内側底面部を抉るときには手斧(ヨコ斧)型で、内側側面を削るときはマサカリ(タテ斧)型で使用するのが可能であり、合理的でもある。この種の石斧に限らないが、とくにこの狭刃形石斧は木工の仕上げ段階の工具として、双方向の機能をもつことが考えられないだろうか。

## 八重山の自然石材供給地と需要圏

紹介した狭刃形石斧の石質は緑色片岩である。波照間島は周知のように隆起サンゴ礁の島であり、石灰岩がほとんどを占める。柔らかくて脆い石灰岩は石器に適さないので、先史時代の石器材料のすべては島外に求めた。石器にはほかに磨石、ドリル、石皿などがある。これらの石質は緑色片岩、ハンレイ岩、輝緑岩、花崗岩などで、自然露頭は石垣島の中・北部地域と西表島の東部の一部だけで、トゥムル層のなかに含まれるという。それ以外の八重山の島々には石器に適した石材の自然分布は見られないようである。これらの石器ははるか与那国島や宮古島の遺跡でも出土するが、南琉球先史時代には石垣島、西表島の石材がすべての島々の供給源となっていたのであろう。

日常生活の主要な道具に欠かせない石器の材料が両大島にのみ存在していたということは、すべての石器時代を通して、この両島との往来の道をもっていたということを意味する。この両島が中核となって、石器素材供給を契機としてその他の情報の拠点となつた可能性がある。それは石器素材だけでなく、食糧や骨器の材料たるイノシシについても言える。イノシシの自然棲息は同じくこの両大島

だけである。イノシシの供給源も同様であったと見られる。八重山あるいは南琉球社会には石垣島、西表島を中心とするネットワークが存在していたと見られる。石垣島と西表島が石材とイノシシの供給地であることを媒体として、文化的交流の発信地、経由地としての役割を果たしていたのではないかと考えるのである。

### 狭刃形石斧の位置

八重山型石斧の三大形態、撥形、短冊形、狭刃形のすべてが、現在のところ北琉球の石斧群とは異なる。撥形は北琉球だけでなくあらゆる地域に見られるが、粗面整形という点からするとその多くもやはり八重山の特徴的な石斧といえる。そして、これらの類型の石斧がいくらかの傾向（後期における石斧卓越期、貝斧卓越期の存在など）が指摘できるものの（高宮廣衛1996）、前期と後期では明確な相違はないことがわかっている。

狭刃形石斧は古く位置づけられている波照間島下田原貝塚でも、新しく位置づけられている石垣島の崎枝赤崎貝塚でも出土しており、主流ではないものの八重山先史時代に一貫して製作使用されてきている。したがって、狭刃形石斧も、八重山新石器時代の開始とともににもたらされたものであろう。短冊形石斧も含めて、八重山の石斧文化は前期から後期へ伝統文化として継承されているのであり、断絶はしていない。シャコガイ製貝斧文化だけが、後期に新たにもたらされたのである。それを新たな集団の渡来ととらえるのであれば、断絶ではなく両系文化の平行かも知れない。しかし、明治時代の人類学の反省を踏まえると、考古学的な資料と人間集団の相違や系統を関係づけるのは容易なことではない。

（あさと しじゅん：所長）

（ほんだ しょうせい：元県立高校教諭）

### 註

- 金関丈夫ほか 1964 金関丈夫・國分直一・多和田眞淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告・人文科学編』9号、
- 西村正衛ほか 1960 西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚「八重山の考古学」、滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房
- 金武正紀ほか 1986 『下田原貝塚・大泊貝塚 第1・2・3次発掘調査報告』沖縄県教育委員会
- 木下尚子 1987 「八重山下田原貝塚出土石器—國分コレクション紹介」『地域文化研究』地域文化研究紀要2, P. 52-66, 梅光女学院大学
- 高宮廣衛 1994 「八重山地方新石器無土器期石斧の推移（予察）」『南島考古』NO. 14, p. 7, 沖縄考古学会
- 1995 「八重山型石斧の基礎的研究（3）」『南島考古』NO. 15, P. 1-32 沖縄考古学会
- 1996 「八重山地方新石器無土器期出土の石斧のサイズ」『國分直一博士米寿記念論文集 ヒト・モノ・コトバの人類学』, P. 457-467, 雄山閣
- 1999 「八重山型石斧の基礎的研究（4）」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第3巻 第1号, P. 51-126
- 阿利直治 1982 「V-1, 石器」『大田原遺跡』P. 7-45, 石垣市教育委員会
- 森威史 1995 「既存発掘調査報告書より探る石垣島の新石器時代の様相」『南島考古』NO. 15, P. 33-62, 沖縄考古学会